

# シンポジウム：『青森県下北“核”半島の現状と課題』

## 序章

学園祭が最真中の 2015 年 10 月 10 日（土）の午後、専修大学の神田校舎 7 号館 7 階 772 教室において、『青森県下北“核”半島の現状と課題』とうたった、シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、専修大学社会科学研究所と日本臨床政治学会の共同主催によるものである。

総合司会は、専修大学法学部の末次俊之・助教がつとめ、主催側から代表として、日本臨床政治学会理事長の藤本一美（専修大学名誉教授・社会科学研究所参与）が、次のように、シンポジウムの目的と意義を述べた。

「皆さまこんにちは、今、隣の校舎で大学の文化祭が賑やかに行われております。大学も学生があつてことです。若干騒々しくかもしれませんが、我慢していただきます。

何故、このシンポジウムを主催したのかといえ、私は青森県出身であり、長い間、東京の国立国会図書館で調査員、また専修大学法学部で教員を務めてきました。ただ昨年、大学を定年になり故郷の青森県に帰ってみて、いかに故郷＝青森県の現実に疎く、勉強してこなかったかを反省しました。もちろん、東京にいたときも、原子力船「むつ」の問題、そしてまた核燃料の廃棄物の処理の問題は多少、頭のどこかにあったわけですが、自分自身の実体感としては認識することが少なかったのです。現在私は、戦後青森県の政治史を研究中で、1 年ごとに三つのトピックスを取り上げて分析しております。そうしますと、どうしても、原子力発電所の問題やそこから排出される核燃料の廃棄物をどうするかについて、避けて通れない課題として直面したわけです。現在、日本においては、沖縄の「米軍基地問題」、そして全国の原子力発電所からでた「核燃料の廃棄問題」をどうするかということが、極めて大きな政治的、社会的課題として存在しており、私たちはこの二つの重い難題を現世代のうちに解決し、次世代に残してはいけない、と思っております。

そういう視点から、この“青森県下北核半島をめぐる現状と課題”というテーマ考えたわけです。幸いにして、私の高校の大先輩である鎌田慧先生が、ルポライターの立場から 40 年数前からこの問題に取り組んでこられましたので、御報告をお願いしました。鎌田先生は『六ヶ所村の記録（上）（下）』（岩波書店、1991 年）という名著があり、毎日文化出版賞を受賞された、日本を代表する著名なルポライターです。

また今日は、報告者としてもうひと方、毎日新聞社の伊藤奈々恵記者に御出席していただきました。伊藤記者はこの前まで青森支局に勤務され、六ヶ所村の最近の状況を 13 回ほど毎日新

聞に連載するなど、六ヶ所村長選、村議選、住民の最近の状況を克明に記事されました。鎌田先生の著作の公刊から25年経て、若い世代の伊藤さんたちが、いわゆる、青森県の下北“核”半島の近況をどのように把握し、私のような年配者と異なる視点から、六ヶ所村の核廃棄物の処理をめぐる問題をどのように考えているか、お聞きしたいと思った次第です。また、国際政治が御専門で、世界とアジアの核問題に造形が深い、早稲田大学の山本武彦・名誉教授に討論者の一人として出席をいただきました。最後に、私も青森県の核燃施設反対運動の実態を述べて、討論者の一人として参加することにしました。できれば、このようなシンポジウムを1回で終わらせないで、毎年取り上げ、シリーズにして内容を公刊し、若い世代、とくに学生の皆さんにこの問題への知識を深めて欲しいと思っています。簡単ではありますが、シンポジウムの目的と意義を述べて、開会の挨拶に代えたいと思います」。

## 第1章、下北核半島の実態

鎌田 慧

(ルポライター)

皆さんはじめまして、鎌田慧と申します。今日ここに呼んでいただきましたことを光栄に思います。また今回のシンポジウムを企画された藤本一美先生に感謝を申し上げます。

私は青森県出身でありまして、弘前高校を出てから東京に出てきて町工場で3年間働き、そのあと早稲田大学でロシア文学を学びました。藤本さんがさっきおっしゃったように、私も高校生のころは全然青森県に関心がなくて、東京にしか関心がありませんでした。もちろん18歳まで青森県におりましたから、他の人に比べたらある程度の知識はあります。18歳から自分で働いていましたから労働問題に関心があって、労働問題のライターになろうという気持ちはそのころからありました。それで大学は文学部に入り、社会問題のルポルタージュを書こうと考えていたのです。それで30歳でフリーになって、公害問題から取り組みました。

最初はイタイイタイ病です。長崎県対馬でカドミウムによるイタイイタイ病が発生している、という話がありまして、それを地域の人びとと企業がどういうふうにかえ、どう対応したのかを明らかにしたい、と考えました。『隠されてた公害』のあと、北九州工業地帯の八幡製鉄所などの大企業によって、洞海湾という工業港が真っ黒だったので、その黒く汚染される海の歴史と住民の関係について書きました（『死に絶えた風景』）。

1969年に、新全総（新全国総合開発計画）というのがありまして、青森県は巨大開発という